台大日本語文研究第 40 期
2020 年 12 月，頁 1-20
2020-09-29 收稿，2020-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202012_(40).0001

日影丈吉〈老鼠〉論—台湾的「空間」—

黃如萍*

摘要

日影丈吉〈老鼠〉於昭和 34 年(1959 年) 發表於《宝石》雜誌。小說內容是由「我」的觀點來敘述，「日本人所發生的不可思議的戀愛事件」[1]。故事的背景為，「那時（昭和十八年）我的軍隊駐營於台北市的對岸一個叫新莊的城市」，而場景是戰爭中的台灣。此篇作品在研究史上，並沒有受到各界所重視，然卻在為數不多的研究文獻中，江戸川亂步曾在書評中表示「標題「老鼠」是甚麼意思呢？應好好品味作者獨特之話術」[2]。再者，日影丈吉也表示「在外地的軍旅生活中，發生了幾例的軍隊與人妻之間的姦通事件，以軍隊中的兵長或一起使壞的傢伙為範本」[3]而描寫而成的。

作品背景為台灣，作中出現台灣當時的「高砂啤酒」、「眠床」甚至「西遊記」以及反覆出現台灣戲劇「雙包案」的妖怪故事等，在作中有著甚麼樣的機能呢？且此亦反映出怎麼樣的台灣的實際狀態呢？也都是值得留意的。

本論文在研究方法上，將以文本閱讀的方式來解構此篇作品的架構，並著眼於當時的作品背景。而論證的方式，首先著重「我」所敘事的方式，透過「我」的敘事，解構本作品之整體結構。再者，探討

* 國立高雄餐旅大學應用日語系副教授

1 江戸川亂步（1959）《宝石》9 月号、宝石社。引用為江戸川乱歩著　新保博久、山前譲編（1996）《江戸川乱歩　日本探偵小説事典》（河出書房新社、p369）。

2 参照註 1

3 日影丈吉（1963）〈日影丈吉的周圍〉《宝石》10 月号、宝石社。引用為日影丈吉（2005）「創作ノート」『日影丈吉全集　別巻』（国書刊行会、p604）。

臺灣大學學術期刊資料庫

當時的台灣要素，才能找到存在於日影丈吉文學中「老鼠」之文學位置。

關鍵詞：日影丈吉、「老鼠」、敘事、《台湾風俗誌》、影響

臺灣大學學術期刊資料庫

A Study on the Discourse Analysis of Hikage Jokichi's "Mouse" in the Space of Taiwan

Huang, Ju-Ping*

Abstract

Hikage Jokichi's "Mouse" was published in the "Germ Magazine" in 1959. Contents of the novel were written from the perspective of "I" to describe "the incredible love story of Japanese." Background of the story was "in a town named Xinzhuang when my military was stationed in Taipei City at that time (1943)," that is Taiwan during the war time. This piece of work has been not been highly recognized, yet in some scarce studies, such as that of Edogawa Lampo, who wrote "what is the meaning of "mouse" in the title? I would like to get to know the author's unique use of terminologies." Furthermore, Hikage Jokichi also wrote "in the foreign military life, several incidents of affairs between soldiers and civilian wives and they served as the example of deterioration of military discipline of soldiers and commanders."

In the background of Taiwan, his work mentioned "Takasago," "Sleep Bed," "Journey to the West," and even the repeated scenes of spirit story "Double Bao Case." What are the functions behind? What has been reflected to the actual situation in past Taiwan? These deserve to be given attention.

In terms of research method, this study utilizes text reading to decompose structure of this novel with the focus on background of the work. By utilizing argument, this study emphasizes on the narrative way

* Associate Professor, Department of Applied Japanese, National Kaohsiung University of Hospitality and Tourism

臺灣人文與學術期刊資料庫

of “I” to analyze the overall structure of the work. Furthermore, elements of Taiwan at that time are addressed to define the “mouse” of Hikage Jokichi in the context of literature.

Key words: Hikage Jokichi, “Mouse,” narrative, “Taiwan Social Life and Customs,” impact

臺灣大學學術期刊資料庫

日影丈吉「ねずみ」論—台湾という〈空間〉—

黄如萍*

要旨

日影丈吉「ねずみ」は『宝石』昭和34年9月に発表されたものである。作品について、「私」の視点で語られた「日本人の中におこった不思議な恋愛事件の顛末」[4]である。背景として「その頃（昭和十八年）私の部隊は台北市の対岸の新荘という町に、駐屯していた」とあるように、戦争中の台湾であることが分かる。当作品は従来研究史においてあまり論じられてはいない。その数少ない研究においては、江戸川乱歩が「表題の「ねずみ」とは何であろうか。シトシトと語り込んで行くこの作者独特の話術を味わってください」[5]と書評している。また、日影丈吉自身も「外地の軍隊生活では、兵隊と人妻の姦通の実例はいくつかあった。その中の兵長や、いっしょに悪いことをした奴は、モデルにして」[6]と指摘している。

作品の背景は台湾で、作中に描かれている台湾当時の「高砂ビール」「眠床」、或いは「西遊記」、繰り返されている演劇「双包案」など、作品にどのような機能を果たしているのか、またどのような台湾の実態が現れているのかも注目すべきであろう。

本論では、小説全体の仕組みを検討した上で、当時の作品背景に注目していきたい。論証方法として、まず、「私」の語った話を中心に論じ、「私」の語った話を追うことで、本作品を捉え直したい。続

* 国立高雄餐旅大学応用日語学科准教授

4 江戸川乱歩（1959）『宝石』9月号、宝石社。引用は江戸川乱歩著　新保博久、山前譲編（1996）『江戸川乱歩　日本探偵小説事典』（河出書房新社、p369）による。

5 参照注4

6 日影丈吉（1963）「日影丈吉の周囲」『宝石』10月号、宝石社。引用は日影丈吉（2005）「創作ノート」『日影丈吉全集　別巻』（国書刊行会、p604）による。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

いて、当時の台湾的な要素も探り、日影丈吉文学における「ねずみ」の文学的位置を考える。

キーワード：日影丈吉、「ねずみ」、語り、『台湾風俗誌』、影響

臺灣大學學術期刊資料庫

日影丈吉「ねずみ」論—台湾という〈空間〉—

黄如萍

一、問題の所在

「ねずみ」は昭和 34 年 9 月『宝石』に発表された作品である。江戸川乱歩の初出には、次のような言葉が掲げられていた。

> 戦争中、台湾の新荘に駐屯した日本人の中におこった不思議な恋愛事件の顛末を描いたものである。物語は台湾劇の舞台からはじまるが、その演劇の筋と恋愛事件とのコインシデンスに、異様に不気味なものがある。表題の「ねずみ」とは何であろうか。シトシトと語り込んで行くこの作者独特の話術を味わってください[7]。

乱歩は、当時雑誌『宝石』の編集長であり、「ねずみ」だけではなく、日影丈吉の他作品「飾燈」(『宝石』昭和 32 年 8 月)、「田舎医師」(『宝石』昭和 33 年 4 月)、「月あかり」(『宝石』昭和 33 年 9 月)、「吉備津の釜」(『宝石』昭和 33 年 9 月)、「月夜蟹」(『宝石』昭和 34 年 5 月) など、雑誌『宝石』に愛好ぶりを公表し、乱歩が日影丈吉の作品を非常に傾倒していたと言える。また、上記作品の発表媒体は全て『宝石』であり、乱歩は日影丈吉に投稿依頼をしているのである。

一方、日影丈吉自身は後年、作品の創作の動機、背景を「外地の軍隊生活では、兵隊と人妻の姦通の実例はいくつかあった。その中の兵長や、いっしょに悪いことをした奴は、モデルにして」[8]と述べている。さらに、横山茂雄「解題・解説」[9]によると、「「ねずみ」(昭和三十四年) は台湾物に属する一篇、現実の事件と「双包案」という芝居とが微妙なかたちで重なりあう物語である。日影が台湾の演

7 参照注 4
8 参照注 6
9 日影丈吉 (2003)『日影丈吉全集 5』国書刊行会、p679

臺灣大學學術期刊資料庫

劇に深い興味を抱いていたことは『応家の人々』にも明らかだが、「双包案」の粗筋についていえば、片岡巌『台湾風俗誌』(大正十年)の記述をほぼそのまま借りている。この作品に出てくる新荘は台北のすぐ西、淡水河を隔てたところにある実在の町で、ここからさらに西へと向かうと『内部の真実』などの舞台となった桃園に至る」と指摘されている。

本作は、「私」が語る台湾で起こった姦通事件で、舞台の設定は第二次世界大戦末期の台湾である。台湾は日本から見れば異国情緒に溢れる所であることは想像に難くない。「戯棚(野外舞台)」「正生然とした美男子」、「眠床」、「停仔脚」、「牽手」などのように日本人によく分からない漢字の言葉にあえて読み方がつけられることにより、意識的に台湾という特別な〈空間〉が醸し出されているようである。

ただ、台湾の要素がなくても姦通というテーマも表現できるはずである。ならば何故あえて、台湾の要素を込める必然性はどこにあるのであろうか。

台湾の演劇に関して、横山茂雄に指摘された通り『応家の人々』(昭和 36 年 5 月)、『内部の真実』(昭和 34 年 12 月)と関わっている可能性があるが、日影丈吉の他作品といったん距離を置き、「ねずみ」本作から、台湾という〈空間〉の必然性を問い、続いて作品に綴られている姦通事件を追うことで捉え直していきたい。

二、台湾という〈空間〉

(一)「私」の話の方向性

本節では、「私」の回想する話はどのようなものなのかを見てみよう。

「あの戦争は長かった」「大戦がはじまってから一、二年は、いつ来るかわからない敵の空襲にそなえて国民は律義に暗い夜をまもった。いまから考えると、ふしぎなくらい、よく辛抱したものである」(一)(p290)と、冒頭から本作は「私」が回想する形で語られるこ

臺灣大學圖書館期刊資料庫

とが分かった。

「私」の語りには次のような特徴が示されている。「その頃（昭和十八年）私の部隊は台北市の対岸の新荘という町に、駐屯していた」（一）（p290）「かれらの公共の娯楽だった、これらの廟の祭礼も、戦争中は禁じられていて」（一）（p291）「その頃、この新荘街で、本島人の演じる台湾劇が見られたのは、めずらしい経験といってよかった」（一）（p291）「どういう理由で気むずかしい憲兵隊の許可がとれたか、その間の事情はもう記憶に残っていない。あるいは、その時そういう話は何も聞かなかったのかも知れぬ。／とにかく戦後は台北あたりで、そこここの廟の祭礼に、本式の戯棚（ヒイビイ）（野外舞台）が街角に立てられるのを見たが、そんなものが及びもつかない当時では、（略）」（一）（p291）「私はその時、私の内部に芽を出した孤独感に抵抗していた」（一）（p293）「当時の法律にはまだ姦通罪というものがあったし」（p297）などのように、「私」の〈物語る現在〉の時間軸に基づき、自らの過去（昭和十八年）を顧みることで、「私」が、語る過去の事象を整序し、構築していっていることが分かる。

波線部のように前のことは別として、「とにかく」と本題に戻ろうとしていることが見られる。このように、記憶を辿りつつ過去を再現している叙述の中には、「このいやな事件の始末を、てっとりばやく話してしまいたい」（五）（p293）のように語りの場に〈読者〉を意識しつつ、語っている箇所が見られる。

したがって「私」は、「その時」「当時」の事件を意識して構築されたものであり、「私」が不偏的に語られることはむしろ不可能である。このように、「私」が作り出した話を一定方向に進めようとする姿が、その語りからうかがい知れる。

（二）時代の雰囲気

「私」の話には、もう一つの特徴が見られる。「内地ばかりではなかった。日本領土の先住民達も、役場から伝達される軍の命令を、忠実におこなった」（一）（p290）「花沢は新荘に疎開していた内地人で、本宅は台北の西門辺にあるということだった。花沢は台湾新報

臺灣人學學術期刊資料庫

の社員で、現地召集になり、鳳山の通信隊に行っていた」「新荘の町からすこし離れたところに、台北の内地人の疎開部落がある。兵隊の中には、そこへ出入りする者が、かなりあった。兵隊と内地人のつきあいには弊害もともなうが」（p295）「汗にまみれて働くことを忘れてしまった内地人のひとりだった」（p297）「だが、内藤は本気なのかな。やつには内地に細君もいれば、子供もいる」（p302）「劇というよりは、廟の祭日や祝日に買われて、無銭で見せる内地の里神楽や茶番のようなものである」（p309）「内地の留守家族へ金の無心をいってやっていた」(p317)、「本島人の演じる台湾劇が見られたのは、めずらしい経験といってよかった」（p291）「大丈夫だって、班長。こんなことは、そう簡単には行きませんよ。本島人の牽手（かみさん）を強姦したのとは、ちがうからね」（一）（p299）などの言葉の表現から当時、戦争の雰囲気がありありと描かれている。

「内地人」と「本島人」[10]のように、その呼び方から、当時の「内地人」（日本人)、「本島人」、そして最下層に「蕃人」（いわゆる台湾の先住民族）という階層秩序が反映されている。ただし、波線部のように、当時の階層秩序から外れ、「内地人」に対し、香しくない視線も同時に読み取れる。

また、下線部「本島人の牽手（かみさん）を強姦したのとは、ちがうからね」に示されたように、この姦通事件は日本人の男女同士であるため、「本島人の牽手（かみさん）を強姦した」ことより複雑で扱いにくく、罪が重いと言えよう。元来、「当時の法律にはまだ姦通罪というものがあったし、部隊がこの問題をとりあげれば、結果は軍法会議にかけられる性質のもの」のため、本来は罪が問われるはずである。

・新荘の演劇は、戯班も観客も高級な方で、一般の台湾劇はもっとひどい状態だ。古劇のセリフは官話だから、土話しかわか

10 「こうした統治体制の下では、「文明化」の度合いによる「内地人」—「本島人」（漢族）—「蕃人」のエスニックな階統秩序が意識され、そこでは漢族と先住民族とのエスニック・バウンダリーは概してそのままであったと見ることができる」（若林正丈（2001）『台湾－変容し躊躇するアイデンティティ』ちくま新書、p50）

臺灣大學學術資源中心

らない民衆には、われわれが、あの劇を見た時のように、筋も何もわからず、きれいな衣装に眼をみはったり、ひとところに人が多勢あつまっている、にぎやかさを楽しんでいるだけなのだ。（三）（p309）

・「花沢が姦通事件を公表しないのは、世間のせまい植民地人種に特有な羞恥心からであるらしかった」（四）（p315-p316）

「土話」という言葉は、〈日本人〉という主体を形成し、その外郭に「土話」を見出したのである。「官話」、「土話」などは歴史の記憶やイメージを喚起し意識される言語なのである。「土話」という言葉から見出された〈未開〉、〈土着〉などの概念があり、〈軽侮〉の感情を向けるとともに〈日本人〉としての優越感が同時に込められていると読み取れる。ただし、下線部のように、「土話しかわからない民衆」はおろか「われわれ」のような〈日本人〉も同様に、台湾劇がよく分からないのである（この点について後述する）。

また、「台湾劇は大陸から渡った雑劇で、写実的な舞台を飾らない。乏しい小道具で抽象的に場面を暗示する」（一）（p292）のように、台湾劇の実態が伺える。さらに、「花沢が姦通事件を公表しないのは、世間のせまい植民地人種に特有な羞恥心からであるらしかった」（四）（p315-p316）と、その「植民地」から日清戦争で獲得した台湾植民地のことが想起させられる。「そこではじめて真偽が明らかになったわけだが、シナの話にはよくある手ですよ」（p308）のように、「シナ」（論者注：「支那」）という言葉には軽蔑の感情が交じっていると読み取れる。

以上のことから、台湾は日本から見れば異国情緒に溢れている所であることは想像に難くない。しかし、台湾に関しての上から見下すような目線、つまり蔑視の表現も散見される。ただし、その蔑視の表現についてであるが、無意識的に表出しているだけの可能性が全くなくはないと言えよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

三、〈不安〉の「私」

姦通事件を扱う際、「私」の〈不安〉の心情表現は、作品の中に多く示されている。

「その感じには別に理由はなかった。私にはときどき前後の連絡もなく、恐怖に似た違和の感覚に、ぞっとする癖がある。が、いつもたいがい、はっきりした理由を求めることはできない。／私はその時、私の内部に芽を出した孤独感に抵抗していた。私には理解できない劇の進行に、上機嫌な笑い声を立てている人達は、日常娯楽を奪われているのだから、当然のことなのだが、私に、ふだん気のつかなかった未知なものの与える不安を感じさせたのだった」(p293)という描述の後、「内藤が私の背後に来て、ぽんと肩を叩いたのは、その時である」(p293-p294)と「姦通事件」の発端につなげられる。下線部のように不安が語られ、そしてこれからの話は不安を与えるものだと事前に読者に一種の〈暗示〉をかけている。

そもそも、姦通事件はどのように起こったのか、「新荘の町からすこし離れたところに、台北の内地人の疎開部落がある。兵隊の中には、そこへ出入りする者が、かなりあった。兵隊と内地人のつきあいには弊害もともなうが、禁止するわけにも行かない実状だった。お互いに同情しあうばかりか、利用しあう。弊害は利害からばかりでなく、共感からも起る。内藤の場合が、それに近いものであった」(p295)と「私」は内藤の味方だというわけではないが、「姦通事件」が始まる合理性を説明している。

内藤の人物像について、「内藤兵長は酷薄な顔をした三十男だった。地方での職は土建業の小頭だが、軍隊でもヤクザめいた言葉を使う。私とは同年兵のために、お互い好きではないが、何か特別な連帯感でつながれていたらしい。だから、ことごとしいかれの呼びかけに、私は何気なくついて行ったのだ」(p294)と語られている。「地方での職は土建業の小頭だが、軍隊でもヤクザめいた言葉を使う」と言わば〈下〉にいる内藤の呼びかけに、何故内藤の「上級者」である「私」がついて行ったのかが説明されている。

このような内藤であるが、彼によって語られた相手の女(論者注、「花沢の細君」)について、「それにくらべると、兵隊のつきあいは気がおけないんだ。あの女のいうとおりには、おれにはいえないがね。あの女はインテリだから」と説明している。しかし、その後

臺灣大學學術期刊資料庫

に続けて違う意見も見られる。

> 「もっとも、あの女、こういう話をおれにして聞かす時、いつも、お前にはわからないだろうって顔をするのが、しゃくだけれどね」／「そういう意味のインテリかね」／「いや、字はうまいし、なかなかたいした女だよ。だが、女なんてものは、ぶっぱたいて、いうことをきかせなくちゃ、だめだ。引っかけるまでは別だがね」と、内藤は笑った。／まるで、他人のことを話しているような内藤の態度が、私にはもどかしくもあり、心配でもあった。（p298-p299）

内藤は「軍隊でもヤクザめいた言葉を使う」ような〈下〉にいる人間であるが、「インテリ」である相手の女との関係でも〈下〉にいるように伺える。ただし、波線部のように、女性蔑視の発言も同時に見られる。

内藤の人物像に戻るが、「内藤は半分讒悔（ざんげ）のような、半分惚気（のろけ）のような調子で、その話をした」（p295）「内藤は躁狂じみたハリキリ方で下級兵を痛めつけたりする半面、子供には目のないようなところもあった」（p295）「きめのあらい残忍な顔をしているが、内藤の眼には無邪気な光があった」（p296）「内藤はどんな事情をやっていたのか、これも想像のつかない場面だが、ふうてんなところのある内藤には、似合わなくもないと、私は思った」（p315）などのように、内藤に関する描写は一面的ではないことが分かった。

引用の二重線部のように「私にはもどかしくもあり、心配でもあった」、また「私は小長谷のお喋りを聞いているうち、次第に不安になって来た。花沢夫婦と内藤の三角関係が、何の変化を見せず、依然として続いているらしいのが気になった。／折角忘れかけた問題を、台湾劇の話で呼びさまされ、おまけに今度は、双包案の妖怪ばなしのせいか、妙に不吉の危惧感まで加わることになった。その日もその翌日も、私は落ちつかない気分ですごした」（p310）、「が、放っておけば、どんなことになるかわからない不安が、私を真剣にしていた」（p316）などのように、「私」は常に何かを予感し、「心配」「不安」「落ちつかない気分」などの心情が繰り返し吐露され

臺灣大學學術期刊資料庫

るという形で語られている。

姦通事件に関して、「熊井はとうとう白状したが、その内容は私の想像どおりだった」（p314-p315）、一方「だが、結果は、私の思うようにはならなかった」（p317）ことも発生した。事件を回想する際に事件の進行について、「私」は何度もこの事件を止めようとし、「私」なりに、協力していたが、結局失敗という結果になってしまった。

・私は内藤の反省をうながすような言葉を、二、三度、口に出してみた。花沢が帰って来たいま、そっと遠のいてしまうのが悧巧なのはないか、というようなことも、いった。が、内藤は聞こえないふりをしていた。（p299-p300）

・私には内藤が、それほど花沢の細君に夢中になっているとは思えなかったが、私の反対にあうと、彼の目にチラチラ真剣な色が浮かぶのを見て、案外、本心はわからないと思いなおしたりした。／内藤はやはり彼のしでかした事のなりゆきを、おもしろがって見ているという感じが強かった。彼は悪い事、禁じられている事を、楽しんでいたのだ。それにくらべて内藤の上級者である私は、彼をけしかける気には、もちろんなれなかったが、といって叱りつけたり、断固とした処置をとる気もなかった。私も内心では彼の行為を否定しきれなかったのかも知れない。（p300）

「当時の法律にはまだ姦通罪というもの」があるため、姦通事件に関して、内藤は完全な〈悪者〉である、一方、内藤の「本心」はわからない可能性があると「私」は後年回想している。回想しながら、過去のことを反芻し、反省していることが分かった。

以上検討してきたように、本作では、「私」の視点に従い、当時の事件のことを再現しようとしながら、語っているうちに、「私」の考えや視点が吐露されていくのである。

「私」は「私」なりに、姦通事件の解決に協力していたが、結局失敗だった。それにしても、内藤が単なる〈悪者〉として読まれるのではないことから、本作に出て来る人間関係は、かなり〈混沌〉としていると言えよう。このような状況下によって、事件の展開が「私」の〈不安〉によって悲しい結末の可能性がほのめかされる。

臺灣大學學術期刊資料庫

最後、ようやく事件に白黒が付けられるに至るが、物語の終盤では「花沢の細君」は「やはり、どこが常軌を逸した計画だった」ために、子供が「花沢の細君の使った毒物」である「殺鼠剤（ねずみとり）」を舐め、「案の定、母親の見ている前で、死んでしまった」と悲しい結末になったのである。

本作には台湾にいる軍人たちの間に起こった姦通事件が語られ、台湾人に対して、無意識的な差別表現が作品の中に示されている。しかし、姦通事件を通して、皮肉にも日本人のでたらめも同時に反映されたのである。このように、植民地台湾、そして日本軍という立場の中で出会った人間模様の複雑さ、さらには不可解さをも描き出している作品だと言える。

四、『台湾風俗誌』との関わり

「ねずみ」には台湾の演劇である「双包案」の内容が挿入されているため、本節では「双包案」との関わりを検討する。

先述したように、横山茂雄「解題・解説」[11]が「片岡巖『台湾風俗誌』(大正十年)の記述をほぼそのまま借りている」と指摘している。本作にも「私は以前ひまつぶしに、台湾事情をしらべた記録や書物を、読んだことがあるので」と述べられているため、何らかの「台湾事情」の「書物」の存在が仄めかされている。

『台湾風俗誌』[12]にある内容と比べてみると、作者がより完成度の高い作品を目指して他作品から参照することはよくあることであるが、参照することによる改変を検討することで作者の意図を読み取れるのではないだろうか。

大正 10 年 2 月 10 日に台湾地方法院（裁判所）で通訳官を務めていた片岡巖が『台湾風俗誌』を書いた。台湾日日新報社より出版され、計 1184 ページ全 12 巻である。「台湾風俗誌はまさしく台湾社会の側面史であると紹介され、台湾の伝統的な社会風俗慣習などの研

11 参照注 9

12 「片岡巖『臺灣風俗誌』」を便宜のため、以下「片岡巖『台湾風俗誌』」にする。また、旧漢字から新漢字にする。

臺灣大學學術期刊資料庫

究に非常に価値が高い作品だと認められている」と、当時の民政長官の下村宏氏（後任朝日新聞社長）は述べている[13]。

「私」の語りを追って行くと、台湾に関する記述が多いことが分かる。

作中に、「子弟戯（ツウチイヒイ）と呼ばれる素人劇団の公演」、「戯棚（ヒイピイ）（野外舞台）」「正生然（チアシエン）とした美男子」、「眠床（ねだい）」、「停仔脚（アーケード）」、「牽手（かみさん）」、「包種茶（ほうしゅちゃ）」、「子供を買って育てる螟蛉子（ビエンリエンキア）という風習があった」、「高砂啤酒」、「西遊記」、「あれは双包案（シアヌバウアヌ）といって、台湾劇の中でもおもしろいものですよ」など台湾の要素が点在している。下線部に示されたように、台湾に関する単語の説明が付けられていたり、さらに、「眠床（ねだい）」、「停仔脚（アーケード）」、「牽手（かみさん）」などのように日本人にとってわかりにくい理解できない漢字の言葉にあえて読み方がつけられていることから、意識的に台湾という〈空間〉が醸し出されていると言ってよいだろう。

「陳氏と王仁の結婚は、彼女の意志ではなかったのかも知れない。むかしの中国には、いや台湾には現に、近頃まで、子供を買って育てる螟蛉子（ビエンリエンキア）という風習があった」（p309）の箇所について、『台湾風俗誌』では「螟蛉子とは同房即ち親族に非らざる異姓の人の子を買ひて養子となしたる時其養子を螟蛉子と云ふ」（p237）と記載されている。

「彼女（論者注：花沢の細君）の意志」ではないことを説明するために、「螟蛉子（ビエンリエンキア）という風習」が挿入され、その説明が本文中に付け加えられている。読み手は台湾に関する風習の知識が獲得できるように促されている。

新荘の演劇は、戯班も観客も高級な方で、一般の台湾劇はもっとひどい状態だ。古劇のセリフは官話だから、土語しかわから

13 「大正十年（民國十年，一九二一年）二月十日，當時任臺南地方法院檢察局通譯官片岡巖，曾著「臺灣風俗誌」，由臺灣日日新報社（今台灣新生報之前身）發行，共一千一百八十四頁，分十二集。誠如當時任民政長官下村宏（後任朝日新聞社長）所說：「臺灣風俗誌正是臺灣社會的側面史」那樣，這是一部研究臺灣舊有風俗習慣極有價值的空前鉅著」（黃得時〈光復前之臺灣研究（代序）〉片岡巖著、陳金田譯（1975）《臺灣風俗誌》大立出版社）

臺灣人日語學術期刊資料庫

ない民衆には、われわれが、あの劇を見た時のように、筋も何もわからず、きれいな衣裳に目をみはったり、ひとところに人が多勢あつまっている、にぎやかさを楽しんでいるだけなのだ。劇というよりは、廟の祭日や祝日に買われて、無銭で見せる内地の里神楽や茶番のようなものであるなどと、小長谷はいつ、かきあつめたのか知らない知識をならべて見せた。（p309）

台湾の演劇は「言葉のわからない私には、もちろん劇の内容はチンプンカンプンだったが」（p292）「そこに展開している話の筋がわからない私は、そのテーブルを見ながら、想像をめぐらすのだった」（p292）「私には理解できない劇の進行に、上機嫌な笑い声を立てている人達は」（p293）と、「私」には理解できないことを何度も触れている。

一方、『台湾風俗誌』の台湾劇（第五章第十八節　「観劇」）に関する項目によると、以下のようである。

台湾に於いては祝祭日、慶弔日には必ず無銭観覧の劇を演ず、故に土人老若男女好んで劇を視る、然るに内地人の如く劇の筋書及び俳優の巧拙を観るものに非ずして、徒らに俳優の着けたる服装の美麗なるを見て喜ぶものなり、其甚しきに至りては何の劇題なるかをも知らず、（略）只人多く出て熱鬧するを見て喜ぶものなり、要するに台湾劇は大概官話を用ふるを以て之を見るも聞くも少しも其意を解せざるを以て、（略）。『台湾風俗誌』（p214）

以上のように「ねずみ」には『台湾風俗誌』による情報を参照したと思われる部分がある。

「ねずみ」と『台湾風俗誌』とを比較した上で、注目したいのは波線部及び下線部である。「土語しかわからない民衆」が劇の内容を理解していないのはともかく、「われわれ」のような〈日本人〉も台湾劇のことがよく分からないという記述である。作者の改変については、『台湾風俗誌』に見られる「内地人」としての優越感が取り払われており、同じように、よく分からないのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

さらに、『台湾風俗誌』に「台湾の演劇」という項目では、「劇題は歴史物、小説物等の勧善懲悪に關するもの及び滑稽物、世話物等を演ずるものとす」（p207）と書かれている。また「劇の筋書」では、「劇の筋書きは甚だ多くして一々之を掲ぐる能はず、今其二三を示し参考に供ふ」（p207-p208）と指摘され、「空城計」「双包案」「除三害」三つの用例だけが挙げられ、その三つの中の「双包案」が作品に取り入れられることになったのである。元来、本作における姦通事件は「双包案」の内容によって照射されるためのものであることが否定できない。

> 双包案とは昔宋の代に王仁なるものあり、其妻陳氏、或時実家に帰らんとして途中山林の傍に於て小用を便しに、俄に一陣の妖風吹き起り、一妖怪現はれ陳氏を捉へんとせり、陳氏大ひに驚き走つて実家に帰れり、其夜妖怪夫王仁に変化し来たり陳氏と同衾す、（略）何れを真、何れを偽と分ち難からしむ、流石明官の聞こある包公も大に煩悩し、遂に神に祈りて一神鼠を得たり、後公廷に於て神鼠を放ちたるに神鼠直に妖怪の王仁に咬み付きたるを以て始めて其真偽を明らかにせりと云ふ筋書なり。『台湾風俗誌』（p210）

以上は『台湾風俗誌』における「双包案」の内容である。本作における該当箇所は以下である。

> すると、にわかに生臭い風が吹いて来て、一人の妖怪がすがたをあらわし、陳氏をとらえようとした。陳氏は驚き恐れて夢中で走って逃げ、やっと実家にたどりついた。ところが、その晩、妖怪は王仁に化けてやって来たので、陳氏は良人と思いこんで、同衾（どうきん）した。それから二人は連立って良人の家に帰った。／ほんものの王仁はこれを見てびっくり、カンカンになって妖怪をののしると、妖怪の方はすまして王仁を指さし、きさまこそバケモノだと、ののしる。これがいつまでたっても水掛論で、陳氏にも真偽がわからず、とうとう当時の名判官、竜図閣大学士包公（バウコン）に黒白を決してもらおうと、訴えて来た。（p308）

臺灣大學學術期刊資料庫

内容から「ねずみ」の「双包案」は『台湾風俗誌』における「双包案」の粗筋をほぼ借用したと思われる痕跡が見られる。確かに、横山茂雄「解題・解説」[14]に述べられたように、「「双包案」の粗筋についていえば、片岡巌『台湾風俗誌』(大正十年)の記述をほぼそのまま借りている」のである。では、何故あえて『台湾風俗誌』にある「双包案」の内容を借りなければならないのか。

「ねずみ」には、「包公の神鼠のような、あッという解決法はないものかと、私は首をひねった。が、そんなものが早急に見つかる筈はないし、竜図閣大学士という偉い包公でさえ、人為の妙案を考えあぐねたから神意にすがったのである」(p314)「が、放っておけば、どんなことになるかわからない不安が、私を真剣にしていた。そして包公の神鼠のようなキメ手が思いつかぬままに、私はまた台北へ出て、花沢に会った」(p316)などのように、「私」は「竜図閣大学士という偉い包公」ではないが、「神鼠」を願っている。しかし、「ねずみ」には『台湾風俗誌』に出現されいる「双包案」の「神鼠」が出てこない。その代わりに、事件の解決の決め手は「花沢の細君の使った毒物は、殺鼠剤(ねずみとり)」であり、「神鼠」[15]どころか、鼠を殺すという結末が待っている。

このように、作品の終盤において、決定的な相違が明確になり、その点が小説全体の相異につながっているのである。その改変から、作者の意図が読み取れるのである。「私の頭をどやしつけるような、いやなサゲがついていた」からこそ、後年、回想することによって事件を整理することができたと言える。

以上、確かめてきたように、日影丈吉は片山巌の『台湾風俗誌』に書かれている台湾の事項を借り、意識的に取り入れていることが歴然としている。台湾という要素、〈空間〉を醸し出すために、『台湾風俗誌』からの素材を参考し、意識的な改変から作者の創作意図が読み取れるのである。このように、作品における取り入れの跡は明らかであるため、日影丈吉は『台湾風俗誌』を目にしていたことは確実であろう。また、同時に台湾という植民地、また戦争末期の

[14] 参照注 9
[15] 参照注 4。江戸川乱歩の指摘した「表題の「ねずみ」とは何であろうか」のように、「ねずみ」のタイトルと呼応されているのである。

臺灣大學日據時期刊資料庫

軍隊という特別な〈空間〉における人間関係の〈混沌〉のようなものを描こうという意図も作者にあったのではないかと考えられる。

以上のように、台湾の要素、当時の時代背景を説明することによって、読者にそれなりの〈知識〉を要求していると考えられる。元々本作はタイトルに「ねずみ」であり、まず台湾劇『双包案』の内容に触れることによって、当然のように読者は『双包案』（論者注：台湾の演劇など）を通じて、台湾や台湾の演劇を意識させられ、台湾に関する〈知識〉を自然に獲得させられる仕組みになっている。読者が読み進めるうちに台湾のことを認識し、作者の創作意図（台湾劇『双包案』との違いなど）を考慮しつつ読んでいくという意図があると考えられる。

【付記】本稿は、「日本比較文化学会第 42 回全国大会」での遠隔発表に加筆・修正を加えたものである。貴重なご意見をくださった諸先生方に深謝申し上げたい。なお、本稿は台湾・科技部（MOST 107-2410-H-328-001-MY2）研究助成の成果である。

【テキスト】

日影丈吉（2002～2005）『日影丈吉全集』国書刊行会

【参考文献】

日影丈吉（2005）「創作ノート」『日影丈吉全集　別巻』国書刊行会
横山茂雄（2003）「解題・解説」『日影丈吉全集 5』国書刊行会
若林正丈（2001）『台湾－変容し躊躇するアイデンティティ』ちくま新書
江戸川乱歩著　新保博久、山前譲編（1996）『江戸川乱歩　日本探偵小説事典』河出書房新社
片岡巖著、陳金田譯（1975）《臺灣風俗誌》大立出版社
片岡巌（1921）『台湾風俗誌』台湾日日新報社

臺灣大學圖書館期刊資料庫